

| | | | | | | | | |
|------|---|-------|-------|----|------|---------------|-------------|-----|
| ジャンル | 子ども・教育 | 日本語学習 | 医療・福祉 | 労働 | 災害対策 | 意識啓発 地域づくり | 推進体制の 整備 | その他 |
| 事業名 | 介護の仕事を始めよう！～外国人のための就職支援講座～（就職のための日本語教室） | | | | | | | |
| 団体名 | 財団法人 埼玉県国際交流協会 | | | | | | | |

***** 事業のポイント *****

日本語を話すことができ、日本に長く住んでいるため日本の文化や習慣を理解している在住外国人を対象に、資格がとりやすく、ニーズの高い介護職の仕事に携わる人材を育成する講座を開催し、外国人が介護施設に就職できるよう支援した。

講座では、日本語教師と介護施設の職員から、介護の現場で使われる専門用語や介護技術について学んだ。また、施設での実習も経験することで、日本の介護施設の様子を理解できるようにした。

| | | | |
|------------|------------------------|------|--------|
| 助成年度 区分 | 平成22年度 地域国際化施策支援特別対策事業 | 事業総額 | 730 千円 |
|------------|------------------------|------|--------|

事業の内容、成果等

事業の背景

リーマンショックにより全国で失業者が生まれ社会問題になったが、定住ビザで来日して工場などで働いている日系人も大勢失業し、集住地域では大きな問題となった。埼玉県では、群馬県に接している県北部地域にブラジルやペルーなどから来た日系人が集住しており、リーマンショック後は仕事を失った外国人が連日ハローワークに押し寄せたり、ブラジル人学校がつぶれたため子どもが不就学になるなどの問題が起きた。

このような状況を受け、当協会でも就労支援を行うことになった。失業した日系人は日本に来てから工場などで働いていた方が多いので、一般企業に営業などの仕事で再就職するとは考えにくい。そこで、日本のビジネスマナー等を教える講座ではなく、職員不足が問題となっており、資格を取りやすい介護の仕事に就くための支援を行うこととした。これは、派遣で働くことの多い日系人が社会情勢に左右されやすいことを受け、きちんとした資格を取って経験を積み、安定した仕事をしてもらおうというねらいがある。また、介護の仕事であれば日本人との交流も持てるので、協会が目指している地域での共生にもつながるのではないかと考えた。

受講者を募集したところ、母国では薬剤師など医療関係の仕事や教員などをしていた方が多く、日本に長く暮らしているため、読み書きは苦手でも日常会話は問題なかった。志望理由は「これまで工場で働いていたが、これをきっかけに日本で役に立ちたい」「母国で親の面倒を看られなかったので、代わりに日本でお年寄りのお世話をしたい」といったものが多く、介護の仕事に就くことへの期待がうかがえた。

事業内容

(1) 受講者: 11名 (ブラジル 5・ペルー 2・タイ 1・韓国 1・フィリピン 1・パラグアイ 1)

受講者には事前に受講理由を提出してもらい、簡単な日本語のテストと面接を行った。日本語のテストでは読み書きができるかどうかを確認し、その結果を日本語指導を行う際の参考にした。

(2) 日時: 10月12日(火)～11月18日(木) 13:00～16:00(介護施設実習及び最終日は変更)

(3) 会場: 社会福祉法人松仁会 高齢者総合ケアセンター熊谷ホーム 地域交流スペース ふれあい教室

(4) 協力: 埼玉県老人福祉施設協議会

(5) 内容:

講座では、介護の基礎となる「食事介助」「歩行介助」「衣類着脱」の講習及び実習に加え、施設利用者を理解するために必要となる「認知症」についての講義を行った。介助方法の説明の合間に日本語の説明を挟む形式にし、具体的な

進め方は、日本語教師と、介助方法の指導を担当してくれた介護施設職員とで話し合っ

て決めた。
テキストは、介護施設職員が作成したものを、日本語教師が外国人に分かりやすいように作り直して使用した。その際、振り仮名をつけることと、難しい言い回しをさけることに留意したが、「誤嚥(ごえん)」など、難しくても介護現場で知っていなければならない言葉はそのまま使うようにした。

受講者が一番知りたがっていたのは、「介護をする時、どんな言葉で話しかけたらいいのか」「どんな日本語だったら失礼ではないのか」ということだった。そのため、「声掛け」の説明と実習は必ず毎回行うようにした。実際に言葉を使いながら覚えるので言葉が身に着くのも早く、施設で介護実習をした際も、スムーズに話しかけて、笑顔でコミュニケーションが取れていた。

| 実施日 | 内容 | 詳細 | 会場 |
|-------------------------|--------|----------------|----------|
| 10/12(火) | ガイダンス | 介護の仕事について | 熊谷ホーム |
| 10/14(木) | 食事介助 | 実習、講習 | |
| 10/21(木) | | | |
| 10/26(火) | 認知症 | | |
| 10/28(木) | 歩行介助 | | |
| 11/2(火) | | | |
| 11/4(木) | | | |
| 11/9(火) | 衣類着脱 | | |
| 11/10(水)~16(火) | 介護施設実習 | | 1人1か所、1日 |
| 11/18(木) 11:00~13:00 | まとめ | 実習振り返り、 修了式 | 熊谷ホーム |

(6)受講者の感想:

- ・利用者さんのことを考えて、少しでも気分よく過ごしてもらえるように工夫していることが分かり、感動しました。大変だけど、誇りを持てる、やりがいのある仕事だと思います。(ペルー人女性)
- ・日本で役に立てる仕事に就くにはこれしかチャンスがないと思って参加しました。雇ってくれるところを探すのは難しいかもしれませんが、介護の仕事に就けるよう頑張ってみます。(ブラジル人女性)



衣類着脱の方法について、実技を交えて説明



声掛けをしながら食事介助をする実習
視力の悪い高齢者への介助を体験するために、
高齢者役は目隠しをしている



介護施設実習で、声掛けをしながら衣類着脱の介助
講義で練習していたので、施設職員に「上手で驚いた」と言われていた。
(介助をしている男性と、緑のエプロンの女性が受講者)

(7) 日本語教師の感想:

今回集まった皆さんは、日本の社会の中で役に立ちたい、有意義な仕事に就きたいという意欲にあふれていました。あとは、皆さんが無事、介護の仕事に就けるように応援しています。この人材がただ“日本人と同じ日本語が話せない”だけで仕事に就けないなんて残念なことです。日本語も、英語のように多様化していく時期に来ていると思います。多文化化していく社会の中で、日本語教師の役目と意識も変わっていくべきだと考えました。いろんな国から来た人と共に暮らし、いろんな文化を持った人と共に作る街へと、日本社会が少し変わることを願っています。

工夫した点

① 外国人向けに、日本の高齢者や介護について学ぶ時間を設けた

介護に対するイメージや考え方は国によって違うため、最初に日本の介護の考え方や、施設をどのような人たちが利用しているのかなどを丁寧に説明した。受講者は、日本より平均寿命が短かったり、介護という概念があまりない国の方が多かったため、相手のことを思いやる介護職員の姿勢に感動したという声が多かった。

② 介護施設の職員に参加してもらった

実際に介護施設で働いている職員に指導してもらえたため、介助方法だけではなく、どんな思いでこの仕事を選んだのか、どんなスケジュールで仕事をしているのかなど、現場で働いている人ならではの話をたくさん聞くことができた。受講者からは「認知症の高齢者とどんな会話をしているのか」などの質問があり、現場への興味の高さがうかがえた。

③ 日本語教師と一緒に講座を組み立てた

外国出身者にとって難しいのは、日本語でコミュニケーションを取ることや、専門用語を使って仕事をする事なので、経験豊富な日本語教師に参加してもらい、「介護」「歩行」などの熟語の意味や、「よく眠れましたか？」といった、柔らかい呼びかけ方などの指導をしてもらった。テキストも、外国人が勉強しやすいようアレンジしてもらった。

就職先を探している外国出身者に日本語を覚えてもらうことは重要な課題であるが、この講座では、実技を伴う生きた日本語を学べることと、目的がはっきりしていることから、受講者の日本語の上達が早かった。

④ 介護施設での実習を取り入れた

介護施設に就職しても、「こんな仕事とは思わなかった」と言ってやめてしまう外国人もいるらしく、それも外国人をなかなか採用してもらえない原因になってしまうため、実際に介護施設で実習をする機会を設けることにした。その際に、デイケアのように元気な方が多い施設と、認知症で家族も分からないような方が入居されている施設の両方を体験できるようにし、実際に仕事を探す際の参考にできるようにした。

また、介護施設での実習がカリキュラムに組み込まれていることで、それまでの勉強にも切迫感があり、短期間での日本語の上達につながったと思われる。

今後の課題

この講座は、介護の技術より、介護現場で使われる専門用語を理解することや、柔らかい日本語で声掛けできるようになることなどに重点を置いているため、ここで学べばそのまま就職できるというものではない。受講者は、ここで学んだ知識を活かして、資格を取るために学校に通ったり、自分で就職先を探したりする必要がある。日本語での読み書きができ、普通に日本人と会話できる方でも、外国人ということで就職を断られることがあり、彼らの努力だけではどうしようもない部分もある。それでも、無事に就職して重い認知症を抱える高齢者のお世話をしている外国人もいるので、彼らの力を信じて、地道に理解を広げていくよう活動していくしかないのだろう。

また、この講座を開催して一番驚いたことは、「日本語を覚える気がない」と言われがちな集住地域の日系人が、本当に熱心に日本語を学んでいたことだ。地域に住んでいる外国人に日本語を覚えてもらいたいと思ったら、ただ日本語教室を開催して「日本語を覚えてください」というだけではなく、「～のために日本語を学んだ！」という強い動機を与えること、そしてその先に社会参加できるという希望があることが、何より重要なのではないかと感じた。実際に介護施設に就職した受講者から「たくさんの人に頼りにされて、自分も役に立っているという自信が持てるようになりました。日本に来て初めて社会の一員になれた気がします」といううれしい報告もきており、講座の意義を改めて感じる事ができた。

最後に、国際交流協会のような組織がこのような講座を開催しようとする場合、協力してくれる介護施設や職員を見つけることが一番難しいと思われる。しかし、今回の講座に協力してくれた介護施設の職員からは「一生懸命取り組んでいて、日本人より熱心だ」「地域にいる外国人と話したことはなかったが、外国人への認識が変わった」という感想をもらい、即就職につながらなくても、理解促進の一端にはなったと思われる。受講者も、日本人との交流が少ない方が多かったため、施設職員や入所している高齢者との交流が嬉しかったそう。このように外国出身者への理解が進むことが、これから外国出身者が就職先を探す際に大きな助けになると思われる。まずは地域の高齢者と外国人との交流という形からでもいいので、ぜひ多くの地域で実践していってもらえればと思う。



最終日に修了証をもらって喜ぶ受講者

修了証には「講座を受講した」ということしか記載していないが、仕事を探す際に活用した受講者もいた。